大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十九卷　第二號

昭和九年八月一日發行

哀辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論叢

骨牌稅に就きて……法學博士　神戸正雄
供給曲線の性質……文學博士　高田保馬

時論

輸出統制の諸問題……經濟學博士　谷口吉彥

研究

貨幣的景氣論史……經濟學士　柴田敬
金物價と貨幣價値安定……經濟學士　松岡孝兒
アダム・スミスの廉價卽豐富論……經濟學士　白杉庄一郎

記事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文
織田萬　神戸正雄　山本美越乃
河田嗣郎　本庄榮治郎　小島昌太郎
汐見三郎　黑正巖　田島順
谷口吉彥　財部靜治　大國壽吉　石川興二

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

田島先生を追憶する
酒の話三つ

神戸正雄

（一）田島先生の逸話は大抵、酒と關係を有つ。先生は、酒を好み、酒を友とし、酒を生命とせられた。壯時には可なりの酒量であつたが、晩年には餘程、節酒せられた。けれども酒なくして何んの人世かなといふ氣持だけは、何時までも持ち續けられた。其れほどとは思はなかつた私は、其誤解から、いたく先生の御機嫌を損じた事がある。それは忘れもせぬ先生退官の直前の年首に、經濟學會恒例の新年宴會を、日本酒本位の純日本式の其れから、酒抜きの質素な會へ改めては何うかと發案した。處が先生は直ちに起つて之を反

駁せられ、私も其爲め案を撤回した。其折り、先生は酒を飲まぬ位ならば生き甲斐はなしとまで絶叫せられた。酒が如何に先生の生存に重い意義を有つて居つたかを伺ふに足る。

（二）　かほど先生を怒らしたことのある私も、其原因となつた酒につきては、嘗て短い時の間ではあつたが、先生と飲み仲間であつたことがある。そして先生と酒量を爭つたことさへあるのは、私にとりての良い思出である。私は長く、酒をあまりに飲まぬやうにして居るが、實は若き時には盛んに飲んだものであり、又、飲み得たのである。明治三十六年頃、先生と一緒に名古屋地方へ講演に往つたときの事、先生と旅先きで飲み競べをして、到頭、私の方が先生を負かしたのであり、それで先生は酒好きではあつたが、酒量は左程でもなかつたやうに思ふ。先生は酒を友として、一生信義を完くせられたが、私は此友人をば早く棄てて顧みなかつた譯である。

（三）　も一つ酒が先生の命を取らうとした話がある。其は例の澤柳事件の時であつた、同氏が京大に總長となつて來るや、各科の教官を諭旨退官させた。文理醫工に亙りて此厄に遇ふた人は少くなかつた。獨り法經からは一人も之を出さずして濟んだけれども、實の處、澤柳氏の當初の腹の中では、法經からもといふのであつた。當時、同氏が教授の退官を迫まるや、本人へ先づ迫まつたのではなく、豫め、其と緣の深き學科相當の他の同僚に同意を求めた。其同意を得た上にて本人に退官を迫まつた。其同僚の同意は他の科では凡べて滯なく得られたさうだ。處が經濟にては少くとも私が之に同意を與へなかつた。其爲めであつたか何うだか、澤柳氏も經濟に關する限り斷行をしなかつた。當時、澤柳氏が私に、告げた處では、先生が酒に溺れて居られるの理由を以て、先生を斥けやうとしたのである。私は酒が先生にとりての一の小さな缺點ではあるけれども、又、先生には、先生にして初めて能くする所の長所もあるからといふ事で、極力、澤柳氏に抗議した。私は其後、二十年間、屢々先生の逆鱗に觸れ

たのであるが、此時ばかりは、先生から喜ばれたのであり、私の一生中にも、是れほど嬉しかつた事は稀である。兎に角、先生の一生には酒が形の影に伴ふ如くに着き纏つた。酒は先生の一生を楽しくもしたであらうが、併し、恐らく大分、損をせられた事もあつたやうに思ふ。